

ネービーズ ルーのカバン



mikatuki98

ドサッと置かれたカバンの色を見て、藍子は咄嗟にネービーブルーだと思った。自分の名前の色よりもやや紫がかった色を、コレ藍子の名前と色と同じだね！ と他人に言われる度にそれはネービーブルーだよ！ 藍色はもっと……と、うんざりするほど説明して来た。そのせいか、ネービーブルーの物に異常に反応してしまう。いや、確かにネービーブルーは日本の色の藍色に相当すると色彩検定なんかの説明にある。だけど相当するだけのことであって、厳密に言えば微妙に違うのだ。そう思う藍子も多分、自分の名前にこの漢字が使われていなかったらここまで拘らなかつたらう。

この日ネービーブルーのカバンが置かれたのは、新幹線の三人掛けシートの通路側の席だった。藍子はその窓側に座っていたが、出入り口に一番近いシートなので列車が何処かの駅に停車するや、出入り口のドアが開く音と共に乗客が入って来て落ち着かない。特に真ん中と通路側の席が未だ空いていたので誰かが座るかもしれないと思い、出入り口の様子を見ていた。ネービーブルーのカバンを目撃したのは丁度その時だった。

しかし、藍子はカバンが通路側に置かれたことに不審を抱いた。何故なら、普通はカバンを真ん中の席に置いて人間が通路側の席に座るだろう、もしくはカバンを棚に上げて、人間は通路側の席に座るだろう。そう思ったからだ。そもそも窮屈な真ん中の席を好んで座る人間は先ず居ない。知り合いならまだしも、見知りぬ人間同士がくっ付き合っ座ることの方が不自然に思える。ところが不自然にも、ネービーブルーのカバンの持ち主は真ん中の席、つまり藍子の直ぐ隣りに座って来た。

不幸にも藍子の嫌な予感の的中した。藍子の隣に座ったのは矢張り男。胸から下しか視界に入っ居ないが、男であることはほぼ間違いない。気のせいか、男は藍子に身体をやや傾けるように座った。

『何、この男！』

瞬間、藍子は身を強張らせ微かに触れている男の肩から逃れようと、窓へ身を寄せた。話し掛けれないように、首も窓の外へ向けた。男は直ぐには話し掛けて来なかつたが、何か切っ掛けを探しているようにも感じられる。

『もう、最悪…… まさか名古屋までずっと乗ってるんじゃないよね？』

藍子は名古屋に住んでいる従姉妹に＜弓＞を持って行く途中だった。学生時代ずっと＜弓道＞をやっていたが、肩を痛めてからやらなくなっていた。そこへ今年大学に入学したばかりの従姉妹が、自分も弓道をやりたいと言うので弓を譲ってやることにした。その目立つ荷物を藍子の座席の前、窓際の壁に立て掛けていたのを男が見逃す筈がなかつた。

「ねえ、それ何？」

男はいきなり挨拶も無しに話し掛けてきた。妙に馴れ馴れしい口調に、藍子の頭にナンパという文字が浮かぶ。

「あ、……弓です」

本当は応えたくなかつたが、完全に無視する勇気も藍子には無かつたので、男にだけ聞こえる

小さな声で言った。どうも一番前の窓際の席はチョットした密室の空気がある。真ん中辺りの通路側なら前後左右に開けていて、会話が他の乗客に聞こえ易い。しかし、前は壁で隣にはぴったりと男がくっついて座り、後の客には多分男の言葉はハッキリと聞こえていないだろう。藍子は一言応えただけで、男を拒否するように再び窓の外を向いた。その態度に男も深くは追求して来なかった。

男は何となくそわそわしていたが、暫くして席を立ち車両から出て行った。どうもデッキでタバコを吸っているようだ。タバコの煙や匂いの苦手な藍子は、どんな乗り物でも禁煙席があれば、必ず禁煙席を選んで乗ることにしている。勿論、新幹線も例外ではない。男が席を立てくれたお陰でやっと開放感を味わえた藍子は、身体を正面に向け少し伸びをすると、チラリとネービーブルーのカバンを見た。一泊の荷物が入る程度の大きさだ。その後藍子は、長旅の暇つぶしにいつも形態している本を取り出し読み始めた。

ところが男は思ったよりも早く戻って来た。しかも何となくタバコの匂いに混じってミントの匂いがする。鼻の利く藍子は直ぐに男が匂い消しの為にガムを噛んでいることが分かった。すると案の定、男が席、もちろん藍子の隣の真ん中の席に戻ると、いきなりガムを差し出した。

「一枚どうです？」

「いえ、結構です」

藍子は即答した。それはそうだろう。はい、ありがとうございます、なんて言って受け取りでもしたら、ねえねえ君……と男が急接近してくるのは目に見えている。イマドキこんな手を使う男がいたのか？ と藍子は呆れながら、読んでいた本に視線を戻した。すると男はグッと本に顔を突っ込むようにして覗くと再び話し掛けてきた。

「へえ～ 本読んですの？ 何の本？」

「あ、いえ、ちょっと」

「難しそうだね」

「……」

藍子はかなりイライラしていた。

『だいたい通路側に席が空いてるのに、恋人気取りでくっついて座って何なの！？ 見かけ私の方が自分よりも年下に見えるのか知らないけど、これでも25歳になるレディーなんだけど？ ホントどんだけ失礼な態度なの、コイツ！ だからコッチに傾くなってば！』

藍子の苛立ちと怒りが微妙に男に伝わったのか、それきり男は大人しくしていた。しかし相変わらず隣に居座っている。途中寝息が聞こえてきたので、藍子と仲良くなることを諦めて寝てくれたのかもしれない。しかし、これから名古屋まで未だ二時間以上ある。藍子はずっとこの男が横に居るのかと思うとストレスでどうかなりそうだったので、何処かの駅で降りる振りをして席を替えようかと算段していた。

ところが、列車がそろそろ広島駅に到着します、というアナウンスが流れた時だった。男が再びそわそわし出した。

『やった！ 降りるかも』

藍子は期待に膨らませた。全身から力が抜けて行くような気分。呪縛から解き放たれるような嬉しさ。藍子はあくまでも男に関心が無いように見せる為、完全に降りるまでは男の方へ視線を向けないようにし、気配だけで様子を伺っていた。

そして男が立った。ネービーブルーのカバンがハッキリ視界に入る。広島駅で降りるのは確実だ。他の乗客が通路に並び、出入り口のドアが開く。と、降りる間に男がメモを一枚、藍子に手渡した。

「ハイ！これ。俺、あそこに住んでるから。気が向いたら来て！」

あそこと言われ、男が指差した方を見るとレンガ色のマンションが目に入った。そして男が列車を降りた後メモを見ると、そこには男の自宅の電話番号と部屋番号らしき数字が並んでいた。

「気が向いたら来て！って……行くわけないじゃん！」

藍子は小声で吐き捨てるように言った。でも、もしもこの番号の部屋に行ったらどうなるんだろう？ と妄想していたら、何だか気分が悪くなったので考えるのを止めた。

『バッカみたい……』

藍子は名古屋駅に到着すると、ホームのダストボックスに男から貰ったメモを丸めて捨てた。

藍子が自分で名付けた<新幹線ナンパ事件>から約一週間経った夜のことだった。テレビで殺人事件のニュースが流れていた。最近毎日のように殺人事件のニュースを聞くので半分慣れっこになっていたし、藍子は自分には関係の無いことだと思って気にも留めていなかった。ところが、アナウンサーが広島駅付近のマンションで、と言った途端ドキッとしてテレビの画面を見た。

「え、広島駅付近のマンション！？ ……まさかね」

藍子は忘れもしない約一週間前の新幹線車中での出来事を思い出していた。

「確かあの男って、広島駅のホームから見えるレンガ色のマンションを指してたよね？」

「ニャ～ニャ～」

藍子がテレビの前で大きな独り言を言っているのを、飼い猫が気にして擦り寄って来た。

「あ、タマコ。あのさ、ちょっとこのニュース気になるのよね……」

藍子が食い入るように見ているテレビの画面には、あの日、広島駅に停車中の新幹線内から見たのと同じようなレンガ色のマンションが映し出されている。しかし、どうも殺されたのは男ではなく、女のようなのだ。

「被害者の女性はキッチンで背中を包丁で刺され、出血多量で先ほど搬送先の病院で死亡が確認されました」

「ああ、タマコ、女の人死んだんだって……」

「犯人と思われるマンションの住人は30代の男で逃走中の模様です。女性の身元の確認は未だ確認されていません。現場には女性が倒れていた直ぐ側に、藍色のカバンが残されていましたが、女性の物かどうか未だ分かっていません……」

アナウンサーの説明が終わるや否や、藍子が突然大声で叫んだ。

「違う！ あれは藍色じゃなくて、ネービーブルーのカバンよ！ あの男が持ってたんだから！」

突然の大声に、タマコが走って逃げた。タマコの走りで吾に返った藍子は、あの日誘いに乗らないで良かったと胸を撫で下ろした。

「……ま、行くわけないけど。てか、まさか私の顔、覚えてないよね？」

藍子は男の顔を知らない。男の胸から下とネービーブルーのカバンしか記憶にない。そして、馴れ馴れしい口調と声。藍子は背筋が寒くなってタマコを呼び寄せると、ぎゅっと抱きしめた。

「タマコ～」

数日後、男が呆気なく逮捕された。直ぐ近所に隠れていたらしい。

「直ぐ近所って…… かくれんぼじゃあるまいし」

その日の夜ニュースに映っていた男の顔は、当然だが藍子には全く見覚えが無かった。

「へえ～ あんな顔してたんだ。ま、とにかく捕まってよかったよね、タマコ」

「にゃ～～～」

タマコも安堵の鳴き声を上げた。と、藍子が画面に釘点けになった。

「……あ、あの色」

逮捕された男がパトカーに乗せられる時、男が着ていた服を見て、トレーナーの色がネービーブルーだ！ と思ったのは、恐らく藍子だけだったに違いない。 了